

# 50周年記念 メモリアルエッセー

## ❖ 最優秀作品 ❖

梅澤 志帆

出場年 (2015年～2018年)

出身校 福山暁の星女子中学・高等学校

会場に到着するとより一層感じられる緊張感。今思えばこの緊張感も全国コンクールの1つの醍醐味ではないかと感じられる。全国各地から集まって来る他校の生徒の顔は自信に満ちている一方で、私は彼らとすれ違う度に自信を失っていった。私の学校より圧倒的に人数の多い学校や打楽器を使用している学校を見ると迫力には敵わないと勝手に先入観を抱いて不安になっていた。

私は最後の全国コンクールでコンサートミストレスを務めた。初めて演奏の要となる存在になり戸惑いはあったものの、皆を引っ張っていけるように体を大きく使って合わせやすくするなどの工夫をした。演奏曲は歌劇「仮面」序曲。人数が少ない団体のため、私が担当した1stマンドリンは私と後輩の2人のみ。その上、1st内でも2部に分かれる所が多くあり、1人で1パート担当していると言っても過言ではなかった。速弾きも多くソロもあり、「私がミスをするると全てが台無しになる。」と私は自分に過剰なプレッシャーをかけていた。また、私の同級生にとってこのコンクールにかける思いは特別だった。なぜなら、私たちは中学1年生の時から最後の全国では絶対に優秀賞と特別賞を頂くという目標を掲げていたからだ。しかし、結果は優良賞。この結果を聞いた瞬間、私の頭は長い間掲げてきた目標を達成できなかったということではいっばいだった。でも今考えてみると、当時の私はコンクールの本当の意義を分かっていたように思われる。当時の私はコンクールというものはより良い賞を頂くことが何よりも大事なことだと思っていた。しかし、今は違う。皆と1つの目標に向かって努力し、何か学びを得ることがコンクールの本当の意義であると思う。実際に私は2つの学びを得ることができた。一つ目は、皆の思いが1つになっていなければ聴衆に感動を与えられないということだ。結果発表の後、私は同級生と反省会をし、自分たちと後輩の今回のコ

ンクールに対する思いに大きな違いがあったことに気付いた。合奏というものは人が集まればできるものだと考えがちである。しかし、実際は全員の思いが1つになって初めて一曲が完成すると私は思う。その意味で合奏というものは難しい。2つ目は、努力すれば後悔はないということだ。正直、私は結果を聞いたときは悔しかった。でも、演奏が終わった時は今までの練習の成果を発揮し、やりきったという清々しい気持ちになることができた。結果が全てではない。人事を尽くして天命を待つ。まさにこの言葉の通り、やれるだけの努力をすることが大切なのだ。

年に一度、全国からギター・マンドリンクラブが集まる。このことはあたりまえのことだと思っていた。しかし、これは世の中が平和で健康でなければ行えないことである。刺激を与えてくれる仲間と出会えたことに感謝し、今後は後輩の活躍を応援しつつ、私もマンドリンを愛好し続けたい。